

東

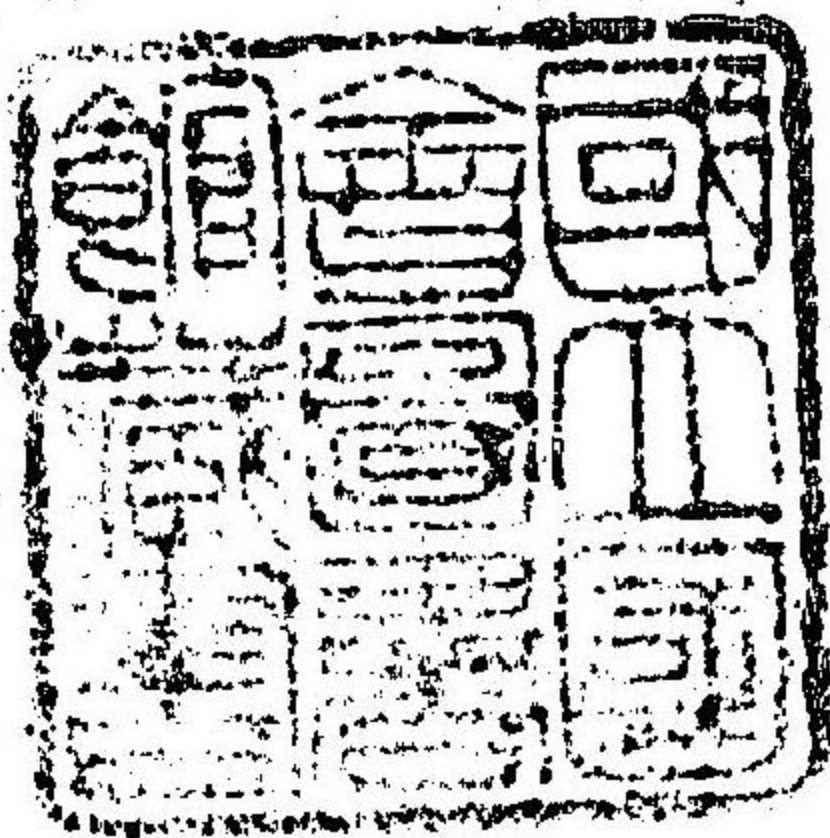
雅

目錄

813.6

A654t

0



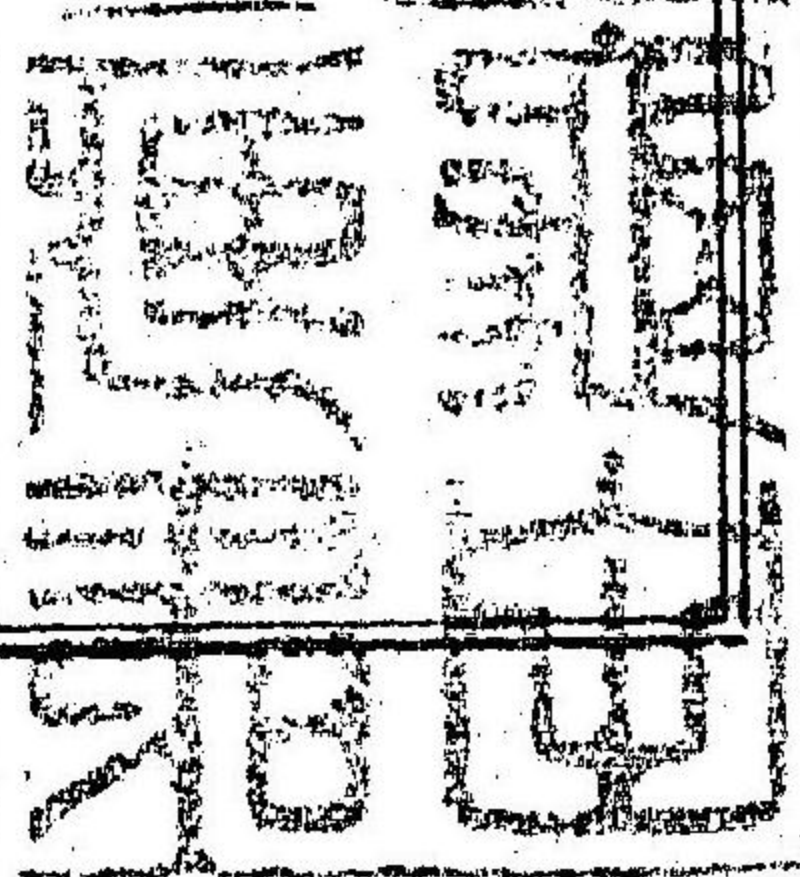
338169

書名解題 校刻例言

東 雅 二十卷 十五門 四十八部に分つ

天文 地輿 神祇 人倫 宮室 器用 飲食 穀蔬
果 鱗 草卉 樹竹 禽鳥 禽獸 鱗介 蟲豸

白石先生の著にして物類訓詁の書なり。先生名は君美字は在中。通稱は勘解由新井氏。江戸の庶士なり。木下順庵先生に師事し。其推舉に因り。元祿六年癸酉年三十七にして。甲府宰相綱豊卿に仕ふ。侍講十六年。藩翰譜の撰この間にありしなり。宰相改名の陞りて。征夷將軍を襲くに及び。先生も從て幕府麾下の列に入り。日夜親侍して。制度の釐革を進言す。正徳元年。朝鮮聘使來る。先生更に其待饗の禮を定む。因て從五位下に敘し。筑後守を稱し。食邑合て一千石。先生少より毎に言ふ。大丈夫として。生きて封侯となる能はずば。死しての後に。閻魔王となるべしと。是に至て。其素志に酬ゆるを得たるが如し。然に將軍在職僅に四年。文昭院嗣主隆家尙幼し。閣老間部侍從房專政務を視る。先生乃匡濟の道を講し。獻替する所また甚多し。此幼主も四年にして逝き。有章統絶ゆ。享保元年五月。紀伊中納言宗吉入て將軍に任ず。從來の侍臣は悉く罷めらる。先生十も亦其中にあり。東雅の書は實に其



明年作れる所なり。かくてより退閑十年。更に世事を言はず。然れども當時政府の士上下共に先生を畏怖し、綽號を鬼と呼び、其姓名を口する者なかりしとぞ。先生なほ生の間に鬼と呼はる、死して閻魔となるを待たざるなり。同じき十年乙巳五月十九日卒去。齡は六十九歳にてありき。

東雅とは日東爾雅の謂なり。是よりさき貝原益軒に倭爾雅の著あり。其題名の意は同じ。先生の作その類に倣ふが如しと雖とも。彼は漢文を以て記し、八卷二十二門なり。元禄甲戌上木

此は國文にして二十卷四十八部。其詳略異同ある推し知るべし。本書の例言に。

此書の要とする所物名を釋するにあれば倭名類聚鈔に見えし所に據りて、天地より始て蟲魚の類に至るまで、其名の釋すべきを釋す。義既に闕けて解すべからざる者と、釋を待たずして義自ら明かなる者との如きは、收載する事を必とせず。

此書の作、丁酉の夏にあり。時に海上に寓して、共に語るべきなし。舊聞を綴集し、筆に隨て編を成す。客問た、一篋の書あるのみにして、校訂に便りすべき者なし。云々。明年の夏病榻暇あり、其書せし所を觀るに、老言紛糺、援引失據、少からず。業に既に志倦み、氣疲れぬ。只其太甚なる者を刪去りて、後者の改定を竣つ。

又安積淡泊齋に贈りし書牘に、此著の事實を記するあり。曰く、

東雅の作は先年某屋敷御用にて前代勤められぬ衆中と一同に、小川町の屋敷召上げられ、未だ代地も受取らずに、早く引拂へなど申す事にて、殊の外とり込み、家財等片付けぬはんすべもなくぬ故、深川一色に借藏と申すを借り、屋敷の下より、舟共に取載せ遣しぬ故、即時に事も濟み申中。さて明日役人衆受取られぬはんと申す日に至り、大火にて某屋敷はさて置き、御城内まで炎燒の事には、享保二年正月廿二日屋敷は空しく赤土灰燼を掃除いたしぬて、差上ぬ先立ちて書籍を始め、資財什器等皆々深川の城へ差越しぬ間、何も燒きぬに及ばずぬへども、急はしく取運ひぬて、委積ぬ事故、深川に半年程寓居の内は、見たき者も取出し申す事も成りぬはず。淋しく暮しぬ故に、幼息共へ書付け取らせぬはんと存じ、一條二條書き記しぬ事共を、其後小石川に移居ぬ日に、大方は源順和名鈔の次第を追ひ、艸稿を建て、中草本の儘にて差置きぬ者には、右申しぬ如く窮厄の際の目を送りぬ料に仕ぬ者故に、引用の書などもはかくしく校合仕ぬにも不及ぬへば、定て紙牘重複勿論と存ぬ下略。此手譜は本書の序文を乞ひたる者なれど、其文は傳へず。

先生の著作は數十百種の多きに至るも、其一大部の書としては、藩翰譜とこの東雅の二書に過ぎず。藩翰譜は其得意の時に成りし書なれば、文理明快にして筆華爛漫たり。東雅は其失意の日に作られし者なれば、文辭の上に隔靴搔痒の憾みなき能はず。從て其論定も

臆断を免れざるが如し。されど先生の博學強記なりしは、此書に於て見らる、なり。其國典に精通し、殊に神代の事に審かなるは、古文通つぐられし餘力にぞあらん。惜いかな。舊事紀を以て正しき上宮太子の御撰として採り用ゐられし事は、蓋し舊事紀は偽書にて、何人が御撰の名に託し、世に出したるなり。故に偽作の書と云ふべからず。偽託の者といふべし。其心して採り用ゐたらんには、固より妨げあらじ。山岡明阿が標記に、舊事紀は太古の序のみ遺れる云々とあるは、非か。又支那の書は爾雅説文文選通雅本草綱目など、事ならん。其序文こそ却て偽造の者なれ。又支那の書は爾雅説文文選通雅本草綱目など、廣く視られし者にて、學植の豊富なるは、實に敬服の外一語なし。本書每條必彼我の書を引證して、其淵源を悉し、其變遷を示し、論断に至りて、其當不當は姑く措き、意の決めし所は筆直にこれを録し、其慧眼遠見學問の上にて、もまた鬼と云ふべし。

東雅の題號は、日東爾雅なる事は、上に云ひき、而して其爾雅といふ本つ書の意義を説かば、其書名は自ら明かなるなり。

爾雅は傳て云ふ周公旦の作る所と、さすれば支那三千年外の書なり。然れども其釋詁釋言釋訓の三篇は、周代の人の手に成りし者と見らる、も、釋親釋宮以下釋鳥釋獸に至る十六篇は、漢人の補入する所なりとは、先學の論定する所なり。されど漢字訓詁の書としては、是書より古きはなし。爾後訓詁の書に雅を稱せし者多し。漢に蒼雅逸雅あり。魏に廣雅あり。隋に博雅あり。宋に埤雅あり。明に至りては、通雅駢雅彙雅赤雅等にし

て、清も亦拾雅別雅比雅支雅韻雅等あり。我國にては、東雅の外に、多喜氏の體雅など尙ありぬべし。

さて爾雅といへる題名の解釋に就きては、爾は近なり。雅は正なりと云ひしより外に何等の説も見えず。其近正の義を釋ぬる時は、正に近しと釋せんか。正に近づくと解せんや。共に周公孔子の作られし名稱とは信せられず。余はまづ雅の字に就き、私見を述べし。雅は鴉と同字にて鳥名なり。如何にして此字を用ゐしかと云ふに、爾雅の雅は古字を疋とす。疋は音疏なれど、又五加切にて雅と同音なるより、謂ゆる假借して用ゐ來りしなり。雅は借字として鳥には縁なきなり。さて疋の字は足也とあり。古文に據れば、疋是同一字にして差別なし。説文に至り誤りて二字となしたるが如し。其音もソと云ひソクと云ふ同じき發音なり。字形既に同くして、音亦同じ。異字とするは非也と云はざるを得ず。而して、其正也といふ疋の字も、古文は疋にて、黑白の差別こそあれ、疋の字と形全く相類せり。故に高田竹山云ふ、鐘鼎文を檢する時は、疋、足、疋、疋同字なりと。詩經の大雅小雅は、古文皆疋の字とす。此歌頌に疋の字を用ゐるに就て、一説を述べん。印度の語に伽陀また偈他といふは、同語なり。漢譯して諷誦とも歌頌とも云ふ。而して伽陀の語原は、歩行の義にして、凡そ步調ほど左イ右子、其正しき者はなかるべし。歌調

の節度もこの歩調の如く正しき拍子を取りてこそ歌うたふべく舞まふべけれ。故に印度にては歩調即是歌調なるより伽陀の語を以て歌頌となしたるなり。人類はじめ動物の歩調は世界中恐くは異同あるべからずされば支那にても同じく歩調より歌曲の節度を定めれば足即正を以て雅頌となしたること。印度の伽陀に同じかるべし。國風は諸國の俚謠にて其疾徐昂低の一樣ならぬ者あるなれど廟堂の樂に至りては謂ゆる四間拍子八間拍子を取りて全く歩調と同一とせざれば正樂といふ可らず。是れ詩經に大雅小雅と稱する歌章ある所以なりと思へり。爾の字は汝なり。然なり。余は是又同音假借なり。余は想ふ。余もまた字の字と同音假借ならん。余は人に从ひ小に从ふ。字は心に从ひ子に从ふ。字形既に同じく音も亦同じ。寧ぞ知らん。古時相通の文字ならん事を。故は余は爾雅の義を字正なりと思ふなり。常に文字と連続して云へど。文は其體を云ひ。字は其用を云ふなり。今日文といふは文章の略語也。爾雅は釋詁釋言釋訓を以て主とすれば其用を説れし書なるは論なきなり。されば字正と見て異義なかるべし。爾雅の釋義に就ては今古彼我曾て此に異説も無ければかくは新説を立て、見しなり。

今回この東雅を出版せんとして其校訂の任に當りしは余一人なり。十年前に藩翰譜を

印行せしも其校訂は余一人にてありき。白石先生に對して深き因縁ありとぞ云ふべき。東雅の書は傳寫本の世にある數百部なるべし。然れども善本は甚稀なりと思はる。先生自筆の本は内閣秘庫にありと聞きしかど切急の事とて見るに及はず。家藏の書を定本として他の四本と參互校訂せしなり。其五本を五色に分ちて下に記すべし。

青本

山岡明阿彌の手入本なり。總論の龍頭に俊明日の數説あり。今探て以て校刻本の上欄に懸けたり。明阿は徳川麾下の士なり。五十にして致仕剃髮し安永九年六十九歳にて歿せしなれば白石先生に及びし人なり。此本は總論の標記のみならず一本を以て全部悉異同を朱書したり。完本とも見做すべけれど。子細に之を検すれば尙誤字脱句を免れず。現に菜蔬の部なる藜の目を擧げず。其釋文は上半を失ひて。下半は薇蕨の註に混入せし如き者あり。森根園の藏書なりしが。今大槻文庫に歸す。

黄本

琢玉齋といへる人の自筆本なり。琢玉齋藏の印あり。且聖紙の鼻下にも同じく其四字を刻めり。或人云ふ。此人は本草家なりと。然れども其手蹟は謂ゆる和様にて。學者の書風とは見えす。恐くは同麾下の退隱者などにてはあるまじくや。而して讀書人にてありし事は寫字の誤謬甚だ少きにて知らる。山岡の一本と

せしは恐くは此本なりと思ふ。其異同を註せし所。この本と全く相合へり。されど註文など寫しさして。書き漏らせし所も處々にあり。是れも蔬菜の條に落の註文を半途に止め。剩さへ其次條なる薺と藜荷とは全く脱して。其次なる蓼より書き繼ぎてあるなどなり。さは云へ青黄二本を互に合せぬれば。まづ完本と云ふべし。此本は弘文館の藏なり。

赤本

黒川博士の藏なり。題して東雅記とあり。合六冊にして二十の卷目を掲げず。異本といふべし。奥書に右東雅記者文政五壬午夏四月寫之。玉琢堂所藏とありて。押印二つ。上は朱文にて曲淵英芳之印。下は白文にて字伯榮の三字なり。曲淵は麾下の士に數家あり。其中の人なるべし。書風美事なれば善本の如く見ゆれど。脱誤あるは免れず。されど鱗介門の綱の條下に。單の字あり。諸本みな草に作る。此書ひとり單なり。即正字とすべし。又諸本共に卷首に室鳩巢の序あり。此本は載せず。而して門人新川氏の跋文あり。他本の無き所とす。校刻本には取て卷尾に添へたり。按ずる此本は新川の家に傳はりし者を寫せしならん。新川氏も麾下の士なるべし。跋文の末段に。伯喈之論衡の語あり。論衡は王充の著にて其字は仲任なり。伯喈は蔡邕の字なり。同じく東漢の大學者なれば新川氏の誤記と

白本

見えたり。

普通の傳寫本にて。更に異彩なし。他本の誤れる所は亦謬り。他本の脱せる者は又漏せり。意齋といへる象鼎式の藏書印あり。何許の人なりやを知らざれども。終初一筆にして寫したり。亦麾下の隱居などなるべし。徳川幕府三百年間。林學士の外に。其學望の高く。著書の許多なるは。新井白石と伊勢安齋との二先生のみ。故に麾下志學の士は其好む所に従ひ。各この二人を信せし者。極て多かりき。加之其學を尊奉する餘り。宗門の如き傾向となり。白石信者安齋信者とも云ふべき偏信者をさへ出せり。されば白石宗の門徒は。開祖の著書を手寫し所藏して。以て無上の福德とせし族も少からず。此輩は其書中の誤字脱文など省る所にあらざるなり。今日傳寫本の多くして。其誤謬も同一なるは。是等の所以にこそあるなれ。此本は富田鏡耕の藏なり。

黒本

筆蹟拙劣にして誤脱一層深し。殆その用をなさずとも云つべし。然れども他本にて字句の間。いぶかしくと思ふ所あるを。心ゆかしに。白黒二本を披閱すれば。沙中得金の賜物ありしも三四に止まらず。故に此二本も一概に棄て遣らず。參考書として時々其用に供したり。此本は上に華々齋文庫の印あり。其人を知ら

す。下に讀杜艸堂の印あれば、一たびは寺田望南の架中にありしならん。今は探
 漢書伯の藏なり。

目録

本書は卷首に十五門の總目を、二十卷に分ちて載せたりき。然るに大槻文庫に
 東雅目録と題せる單行本を藏す。四十八部を掲げ、每部中の物名を上下二層に
 駢列し、字訓を施し、紙數を註す。蓋舊藏者は自用本の閱覽に便ならしめんとて、
 殊更に製作せし者と見ゆ。されど榮蔬の下に藜を脱したれば、其原書の普通寫
 本なるは知るべし。大澤侍從兼下野守藏書の篆字印あり。寛政元年の大成武鑑
 に徵せば、其第三卷なる高家の條に、大澤下野守藤原令徳とありて、從五位下侍
 從と肩書せり。即此人なり。大澤一族は數家に分れたれど、下野守と稱せしは多くなしと、大澤基輔つけぬ。仍て校刻本
 は、此書を底本として目録を別冊とす。但し更に各物の釋文中ある所の異名よ
 り、類を以て附記したる物名、并に記事中に特表すべき稱謂共をも抄出して、毎
 名の下に増記したり。最初は五十音引の索引をも作らんと思ひたれど、時日を
 假さるより、かく目録の下に附加し、上に丁數を措きて本書檢閱の便りとは
 なしたり。

東雅は前にも見ゆるが如く、倭名類聚鈔を本據としたる書なれば、參考の第一は倭名鈔

なり。仍て狩谷液齋の箋註を取て、各條一々校合を悉したり。但し箋註本は十卷本に據ら
 れ、先生の引かれしは二十卷なるべし。故に多少齟齬の所なき能はず。然れども箋註も廣
 本と記して、其異同を掲げしなれば、彼此參據の便はあるなり。鱗介門なる鯉イシフシの
 條下に、網魚を出して、倭名鈔を引き、カラカマと訓せり。箋註には加良加古と註す。本書の
 訓を改むべきなれど、カマを以て説を建てたれば、カラカマの儘になしたり。又瓮盃を混
 用せられしも、改めず。是等の類尙多かるべし。此他引用されし日本紀古事記舊事紀をは
 じめ、萬葉集古語拾遺令義解姓氏錄等より、漢書にては爾雅說文文選正字通など、讀過の
 際尙も心に不審と認むる時は、一々原書に當りたり。されど漏らせるも亦あるべし。
 本書の旁訓は諸本不同なり。先生の原本は、其有無を知らず。青本にあるが儘にしてけり。
 其中に削りしもあり。又時としては他本より加へしもあり。觀者よ一を掛けて百を漏ら
 すの憾あることもあるらん。

假名遣はオヲの用ゐざま。今日と全く相反せり。是は倭片假名反切義解といふ書當時に
 行はれ、今日の如く其所屬を正したるは、契沖阿闍梨に草創すと雖とも、世の學者が一般
 に反正したるは、鈴屋大人の功なり。されば白石先生の時代には、ヲを阿行とし、オを和行
 として固より惡しきにあらず。されど和名鈔は假字の正しきを得たる書なれば、其訓に

依りて記せざる可らず。故に悉く之を倭名鈔に徴して、オヲエエイキを改めたり。但し行文の間は強て正すにも及はず。用の字の假名遣ひ用ひてとありて用ゆと止む。一語にして波行也。行の兩用なり。敢て改めず。又見え聞えの如き。或は見へ聞へと記し。諸本不同のみならず。一本の中さへ又一様ならず。今は正しきに依りて。見え聞えとしたり。されど多くの中には。見落しもあるべく。又活字改植の手落もあるべし。

鱗介門王餘魚の註に。爾雅を引きて。東方有比目魚。不比不行の文あり。之を爾雅釋魚の下に檢せしに。此文なし。余は文意を以て。山海經ならんと考へ。或は白石先生の記臆ちがひならんと思ひ。試みに箋註本を見れば。又同じく爾雅を引きて。此文を出せり。白石校齋兩先生共に博識の士なり。均しく誤られるにもあるまじと思ひ返し。更に正字通の鯨の字檢をするに。亦同じく爾雅として。此文を引けり。而して爾雅釋魚に鯨なし。釋地に言ふ。東方有比目魚。名曰鯨とあり。驚きて釋地を檢すれば。比目魚の文あり。是に於て後世我と同じく。先輩を疑ふ人もあらんかと思ひ。本文爾雅の下に釋地の二字を補ひたり。余の此書を校訂するは。古物保存の意にあらず。今日實用に供せんとの心なれば。かゝる事は他にも四五はありしなり。玉に瑕つくると。眉皺むる人は。おのがじ、蟹め給へかし。

明治三十六年二月

大槻修如電識

東雅目錄

卷一

活字本合四冊

○總論 自一至二十二頁

第一冊 自卷一至卷五

古言今言方言雅言俗言

天文 地輿 神祇 人倫

言語の時勢を論ず

第二冊 自卷六至卷十一

太古言韓語梵語宋元語西南蕃語

宮室 器用 二三四五

語意の差別

第三冊 自卷十二至卷十六

京語の變遷

飲食 穀蔬 果蔬 草卉 樹竹

西洋文字

第四冊 自卷十七至卷二十

禽鳥 畜獸 鱗介 蟲豸

對馬伊呂波

言語の變轉及ひ開結

言と詞との辨別

略語返語

同名異物

借語

古事記萬葉集諸書の語義

漢字用方

古訓近訓

漢字和訓轉似

韓漢方言

梵語

○天文第一 天象 歲時

- 三二天 アメ アマ 虚空アキラ
- 二五日 ヒ クサ カ
- 二六月 ツキ 弦月 望月
- 二七 星 ホシ ミカボシ
- 二七 天河 アマノカハ
- 二七 雲 クモ 天陰テンイン
- 二七 霞 カシミ アサヤケ ユフヤケ
- 二八 烟 ケフリ
- 二八 霧 キリ マキル
- 二九 虹 ニジ ノズ ノジ
- 二九 風 カゼ サ 疾風ハヤチ 回颶ワタリ
- 二九 雨 アメ 暴風アラシ 雹ヒヤリ 氷雨ヒヨウ 暴雨アツシ
- 二九 小雨 サメ 小雨ヒヤリ 天陰テンイン 雨水ニハタツ

三三 露 ツユ ツフヲ

- 三三 霜 シモ シラホ
- 三三 雪 ユキ 沫雪ウツク 霰アヲレ 霰アヲレ 霰アヲレ
- 三三 雷 イカツチ ナルカミ 霹靂カサトケ
- 三三 電 イナヒカリ イナツマ イナツルヒ
- 以上天象
- 三六 歲 トシ トセ 三十年トシ 四十年ヨシ
- 三 月 ツキ 正月ムツキ 二月フタツキ 三月ミツツキ
- 三 月 ツキ 四月ヨウツキ 五月イツツキ 六月ムツツキ 七月シツツキ
- 三 月 ツキ 八月ハツツキ 九月クツツキ 十月トツツキ 十一月イツツツキ 十二月ジュウニツツキ
- 三〇 日 ヒ 干支カンシ 晦日クワイ 朔日セツ 二日ニニチ 三日サンニチ
- 三二 時 トキ アカトキ アカツキ ツカノマ
- 三二 春夏秋冬 ハル ナツ アキ フユ
- 三二 朝暮 アサクレ アシタ ユフベ

卷 一一

○地輿第二 土石 山澤 田園 河海

- 四八 地 ツチ クニ トコロ 地震チクワ
- 四九 土 ツチ ヒヂ 埴土ウツチ 土師
- 五一 磐 イハ イハロ イハホロ 穴居 窟
- 五一 石 イシ イソクイシ ツチクレ 細石 礫
- 五二 砂 スナゴ イサコ マナコ 磯イソナトリ
- 五三 塵 チリ 芥カイ ホコリ
- 五四 泥 ヒチリコ ドロ
- 以上土石

以上歲時

- 四七 古今 イニシヘ イマ コシカタ 昔ムカシ
- 四七 晝夜 ヒル 曉トキ 今朝アサ 今日ケル 今夜コノヨ

- 五八 山 ヤマ 嶺ミネ 峯ミネ 峠トウ 嶺ミネ 嶺ミネ 岬ササ ハナツ
- 五八 丘 ヲカ 陵ミネ 岡ミネ 岳ミネ 麓ミネ ハヤマ
- 五八 谷 タニ ヤツセ ウナ ハサマ 谿
- 六〇 原 ハラ ハル 竹林 松林 川上
- 六〇 野 ノナ
- 六一 杜 モリ 曾戸ソノ 茂梨 森
- 六二 林 ハヤシ 神林 柚
- 六四 藪 ヤブ ヤラ ヤハラ タカヤブ
- 六四 澤 サハ
- 六四 牧 マキ ムマキ
- 以上山澤

- 六五 田 タ 代頃タノ 町チヨウ ナハテ 畔ハタテ 田代 苗代
- 六八 嘆 ハタケ 畝タノ 畑ハタケ 畑ハタケ 火田 治田

六九園 ソノソノフ 背戸 前栽後園
 以上田園
 六九水 ミヅ 瑞
 七〇波 ナミ 奈汰 鳴海 鳴渡
 七〇氷 ヒ コホリ
 七〇泉 イヅミ 飛泉 瀧 立水 伏水 黄泉
 七一沼 スマ 血沼 瀦 泥濘
 七二池 イケ 鑿イケス
 七二塘 ツ、ミ 堤 陂 土堤
 七二堰 堰 牛セキ
 七二井 キ 好井シツ 清水
 七三河 カハ 流 長柄 淵 瀬 湍 淀
 七四江 エ 入江 細江 湨

七五湖 ミヅウミ アフミノミ 近江 遠江
 ミナト
 七五海 ウミ アマ ワタ ホタイ ワタノハラ
 アマ オキ 潮汐ワシホ アサシホ
 ユフシホ
 七六洲 シマ 島 ミサキ セマ セム
 七六岸 キシ 涯 渚 浦 回 磯 回 磯
 ハマ 汀 崎 岬 沙 渕 海
 七六浦 ウラ オモテウラ ウラ、
 以上河海
 卷 三
 ○地輿第三 方位 國都
 八二東西南北 ヒガシ ニシ ミナミ キタ
 日縦ヒタテ 日横ヒヨコ 影面
 背面ソトモ 東海道ワヅツ
 北海道クヌガノイナ
 以上方位
 八六國 クニ 國土 州國ツチ

八七郡 コホリ 國造 縣主 郡領
 アガタ
 八八村 ムラ フシ 竹村 村主スクリ スキ
 スク
 サト 郷 戸籍 里程
 八九里
 八九道 ミチ 阡陌 大路 小路 街衢 辻
 チ 徑路 間道 畿内七道
 ムマヤ 驛馬 驛路 驛舍 驛使 水驛
 九一驛 鈴舟
 九二橋 ハシ 浮橋 高橋 打橋 棧道 瓦圮
 葱臺
 九三津 ツ 湊 渡
 トマリ
 九四關 セキ 三關 烽 防人
 九五城 シロ 柵 稻城 櫓 塹 湍 營 助舖
 キ 筭
 ミヤコ 羅城
 一〇一都
 一〇二鄙 ヒナ 夷 蝦夷 野作
 アヅマツ
 一〇三坊市 マチ 町肆 見世棚 邸家 問屋 店
 イチ 東西町
 以上國都

卷 四
 ○神祇第四 神祠 祭具 陵墓
 一〇五神 カミ 祇 ツミ ツチ ツ、 武智
 クマ 鬼オミ
 一〇八宮 ミヤ 心柱 日隅宮 神明造 王子造
 一〇九社 ヤシロ 齋場 社ツチ
 一一〇神籬 ヒモロギ 磐境 禊
 一一一瑞籬 ミヅカキ イガキ
 一一二鳥居 トリキ 雞棲 華表 長鳴鳥
 一一三注連 シメ シリクメナハ 標
 一一四神庫 ホクラ 叢祠
 一一五賢木 サカキ 神 玉串 龍眼木 波々迦
 已上神祠
 一一七幣帛 ミラクラ 和幣ニエテ 和妙 荒妙
 和衣ウツハタ 楮

人倫 宮室

一〇七 麻 スサ アサ マヲ ソ 苧
 一〇七 木綿 ユフ ユフシデ 穀カチ 栲カチ
 一〇七 木綿 ユフタスキ マサキノカワラ ヒカケカワラ
 一〇八 粿 カシヨネ 精米シネ 桑シトキ 散米マキチ
 一〇九 神酒 ミワ サカハヤシ 葉椀 葉手
 一〇九 神酒 ミワ 膳夫 拍手
 以上祭具
 一一〇 陵墓 ミサキ 山陵 壽陵 荒陵
 一一〇 寺 テラ 伽藍 佛殿 精舎 佛
 以上陵墓

一〇三 父母 チ、 オヤ カゾ オモ 家母
 一〇三 父母 ハ、 テ、 ト、 カ、 タラチメ
 一〇三 子女 コ ムスコ ムスメ 長子 長女 季子
 一〇三 子女 稚子 弱若 愛兒 實子 繼子
 一〇三 子女 父子 孫
 一〇四 兄弟 アニ セ イロネ セウト コノカミ
 一〇四 兄弟 オトウト イロト ナセ ハラカラ
 一〇五 姉妹 アネ ナネ イロセ
 一〇五 姉妹 イモウト ナニモ
 一〇六 夫妻 ラウト フトコ セ ナ ワカセ
 一〇六 夫妻 メ ワガセコ フトメ メロ イモ
 一〇六 夫妻 フキモ フキモ ツマ イモセ 前妻
 一〇六 夫妻 後妻 寡婦 老女 戸母 戸白
 一〇六 夫妻 族 從兄弟 聲 嫁 舅 姑
 一〇六 夫妻 姪 從兄弟 聲 嫁 舅 姑
 以上親族
 一一一 天皇 スヘラキ オホキミ スメムツ
 一一一 天皇 スメムマゴ スヘラミコト ミカド
 一一二 皇后 キサキ ムカヒメ 皇太后 御妻
 一一三 妃夫人 ミメ オトジ オホトジ
 一一四 皇太子 ヒツキノミコ 天津日嗣

一〇四 皇子王 ミコ オホキミ 皇女 親王 内親王
 一〇四 皇子王 オホキミ 法親王 王
 一〇五 臣 オミ マウト 首 使主 臣等 侍臣
 一〇五 臣 ヤツコ 群臣 中臣 朝臣
 一〇七 大夫 マチキミ マヘツキミ
 一〇七 大夫 オスクニマツリゴトマウチキミ
 一〇七 大夫 マツリゴトマウチキミ
 一〇八 大臣 オホマチキミ アン
 一一一 大連 オホムラジ 小連
 一一二 宿禰 スタネ 足尼 大禰 大尼 大宿禰
 一一二 宿禰 大兄 小兄
 一一三 伴造 トモノミヤツコ 伴男 物部 兵士
 一一四 國造 クニノミヤツコ クニツクリ 縣主
 一一四 國造 御家人
 一一五 士 サフラヒ 瀧口 帶刀 北面
 一一五 士 オモトヒト
 一一五 民 タミ ヒトクサ 青人草 青侍 青女房
 一一五 民 オホムタカラ 邑君 田部
 一一七 工 タクミ 番匠 柚 都料匠 鍛冶 鏡作
 一一七 工 テヒト 陶工 畫師 女工
 一六〇 商 アキヒト 販夫 販婦 賣買 贏利

一〇六 巫 カンナギ ウツメ サルメ ワザラキ
 一〇六 巫 歌舞妓 御子 市女 傾城
 一〇六 現 フノカンナキ 神主 禰宜 祝
 一〇六 醫 クスシ 藥石
 一〇六 卜 ウラベ 太占 占合 波々迦 龜卜
 一〇六 卜 歌占 龜占 道占 足占
 以上人品
 一〇六 博士 僧 法師
 〇宮室第六
 一〇七 宮 ミヤ
 一〇七 殿 トノ 内寢 正殿 寢所 懸魚 水木
 一〇七 殿 堅魚木 カラスヲトシ 懸魚 臺股
 一〇七 殿 龜腹 虹梁 千鳥 鴨栖
 一〇七 樓 タカドノ 臺榭 樓閣
 一〇七 樓 屋脊 檜皮 十寸板 瓦舍 草舍
 一〇七 屋 ヤ 四阿 兩下 庇廊 長廊 櫓 軒

○器用第八 冠服 机筵 帳御

- 二二六 冠 カウムリ 玉纒ツルカ 髻華ウツ 挿頭カサシ
- 二二六 冠 豹尾 貂尾 圭冠 鏡冠 幞頭
- 二二六 冠 烏帽子 縹 燕尾 綬 巾子
- 二二四 衣 キヌ 袖 白羽シラハ コロモ キモノ
- 二二四 衣 袂 襟 袴 右衽
- 二二五 裳 モスソ 袴 奴袴 袴 括緒袴
- 二二五 裳 モスソ 袴 特鼻袴 タブサキ
- 二二七 背子 カラキヌ 領巾 相襦
- 二二八 帶 オビ 腰帶 脚帶 大帶 博帶
- 二二八 帶 タラシ 緋帶 革帶 玉帶 石帶
- 二二九 履 クツ 織鞋 靴 半靴 單皮 線鞋
- 二二九 履 袍 襖 褌 袴 直衣 紐 扇 團扇 翳
- 二二九 履 ボタン 行膝 脛巾 笏 總
- 二二九 履 玉佩 綬 平緒 總
- 以上冠服
- 二二三 帷 カタヒラ 幕 帟 帳 帳 幔 幌
- 二二三 簾 スダレ 簀 簾
- 二二三 衣架 ミソカケ 衣桁

二二三 衾

- 二二三 衾 フスマ
- 二三四 枕 マクラ
- 二三四 茵 シトネ 褥
- 二三四 氈 カモ 駮氈 毛席
- 二三五 筵 ムシロ 薦席 御座 防壁 アジロ
- 二三五 疊 タハミ 八重席 美智皮疊 施疊
- 二三六 几 オシマツキ 脇息
- 二三六 床 トコ 牙床 胡床 床几
- 以上几筵
- 二三七 鏡 カハミ 八咫鏡 鏡臺
- 二三八 櫛 クシ 枇
- 二三八 嚴器 カラクシケ 經粉ニ 白粉 黛 脂絹
- 二三九 手巾 タノゴヒ 手拭 打亂匣

二三九 匱

- 二三九 匱 ハンザフ 椽 半挿
- 二三九 盥 タラヒ 手洗 澡盤
- 二三九 浴斛 ユフネ 酒槽 馬槽 澡 浴 澡豆サラシ
- 二四〇 薰爐 ヒトリ 香爐 火籠 フセコ
- 二四〇 火爐 ヒタキ 火鉢 火箸 炭 灰
- 二四〇 燈燭 トモシビ 點火 燈心 燈蓋 燈械
- 二四〇 燈燭 油 油瓶 燈籠 篝 松明
- 二四一 籠 コ 籠籠 堅間 竹籠
- 二四二 箱 ハコ 篋 篋 篋 柳篋 蓋
- 二四二 厨子 ツシ 堅櫃
- 二四二 櫃 ヒツ 長櫃 韓櫃 小櫃 御繩代
- 二四三 机 ツクエ 案
- 以上帳御

卷 九

○器用第九

- 農耕 織紉 裁縫 工匠 鍛冶
- 舟船 車輿 鞍轡 旅裝 漁獵
- 二四四 犁 カラスキ 韓鋤カラ
- 二四四 鋤 スキ 齊斧 齊鋤 鎮ツミ コクハ 椎ツチ
- 二四五 整 クハ 鏝 杵 馬杵 編槌
- 二四六 鈞 カナガキ 熊手 竹杷 杙ツラ
- 二四六 鎌 カマ 桐ツギ
- 二四七 連枷 カラサヲ 竿
- 以上農器
- 二四七 桑蚕 クハコ 鹽 繭
- 二四八 蠶簿 エビラ
- 二四八 篋 ワク
- 二四八 反轉 クルベキ カセリ マヒバ

卷十一

○器用第十一 金器 漆器 瓦器 木器 竹器

- 三〇七 鼎 アシカナヘ 殿瓮 忌瓮 火瓮
- 三〇八 釜 カナヘ マロカナヘ 竜殿 鹽竈 瓦竈
- 三〇八 鍍 サガリ 懸釜 ハガマ
- 三〇八 銚子 サシナヘ 鍬子 ラウシ 鍬流 提梁
- 三〇八 大斗 サスナヘ 大斗
- 三〇九 鍬子 ヒラカナヘ カミナベ カンナベ
- 三〇九 鎗 アシナヘ 鎗
- 三〇九 鍋 カナナヘ 塙 甌 土鍋
- 三〇九 釜 イリナヘ 煎餅盤 ホウロク ホイロ
- 三一一 鈔鑪 サフラ サハリ マリ 金碗 玉碗
- 三一二 鉢 ハチ 盃 腦盃 抹額

以上金器

- 三二二 樽 タル 尊 酒海
 - 三二三 壺 ツボ 罍 罍
 - 三二四 酒臺 シリサラ 酒臺子
 - 三二四 疊子 ウルシヌルノサラ 御器 引入 合子
 - 三二五 大槃 タイハン 朱漆 黒漆 盤俎
 - 三二五 箸 ハシ 筋匙
- 以上漆器
- 三二六 甌 ミカ 麴 大甌 淺甌
 - 三二六 遊罏 ユカ 大甌 酒戸大桶
 - 三二七 甕 モタヒ ミカ 罍
 - 三二七 瓶子 カメ ハイジ 胡椒
 - 三二七 盃 サカヅキ 厄 坏 盞 淨葉 土器 飯次 湯次

- 三一九 盃 マリ 碗 玉盃 金碗 片碗 葉碗 湯碗
 - 三一九 飯碗 汁碗 大碗 中碗 平皿
 - 三二〇 盆 ヒラカ 鉢 枚加 平賀 手扶 殿瓮
 - 三二〇 鉢 ホトギ 陶器 スヤキ
 - 三二一 盤 サラ 皿 葉盤 磁碟 漆碟
 - 三二一 鉢 バン チヤツ
 - 三二一 瓷 シノウツワモノ 青丹吉 泐汁
 - 三二二 罐 ツルベ 釣瓶 湯桶讀
- 以上瓦器
- 三二二 椀 サスエ マケモノ 湯桶
 - 三二三 筍 ケ 飯器 衣器 箆筒 破子 アサケ
 - 三二三 切機 ヌウケ カレヒタ 御飯筒 盛筒儀
 - 三二四 杓 マナイタ 切机 庖丁
 - 三二四 麩杖 ムキオヌキ ムキオシ 麵棒
 - 三二四 酒槽 サカフネ 酒船
 - 三二五 桶 ヲケ 火桶 水桶 菜桶 腰桶 竹篾

- 三二五 杓 ヒサゴ 瓢 匏 柄杓 カヒケ
 - 三二六 白杓 ウス 杓 杓 杓 杓 杓 杓
 - 三二七 碓 カラウス 程 碓
 - 三二七 碓 スリウス スルス 水碓 水車 茶磨
 - 三二八 甌 コシキ 甌 甌 甌 甌 甌
- 以上木器
- 三二九 算 イヒシタミ 飯籠 イカキ 火斗
 - 三二九 笊 ムキスクヒ 素麩 味噌漉 ザル
 - 三二九 篩 フルヒ 絹篩 水漉 羅合 羅斗 篩斗
 - 三三〇 箕 ミ 箕 箕
 - 三三〇 箒 ハキ 箒 掃帚
- 以上竹器
- 無目堅間 籠 アシカ 篋 答篋 カケ
 - 大目籠

四三一	菴蘆子	ハ、コ	母子	鼠麴	鼠耳	白蒿
四三二	蘭	フチハカマ	藤袴	蘭花	澤蘭	
四三三	菊	キク	カハラヨモギ	菊理媛	菊池	倭菊
四三四	蓬	ヨモギ	草	蕪菁	蕪菁	蕪菁
四三五	萩	ハギ	芳宜	鹿鳴草	榛	胡枝子
四三六	薺	ハギ	青蒿	牛尾蒿		蕭萩
四三七	著	メド	合歡著	小葉	齊頭高	
四三八	瞿麥	ナデシコ	大蘭	石竹		
四三九	牽牛子	アサカホ	瓜	旋花		
四四〇	牡丹	フカミクサ	鹿韭			
四四一	獨活	ツチタラ	獨活草			
四四二	葛	クズカツラ	葛穀	鹿豆	葛脰	黑鬚
四四三	藤	フヂ	皂莢	蛇結		
四四四	蘿	ヒカゲ	松蘿	女蘿	サルノヲガセ	
四四五	射干	カラスアフリ	烏扇	檜扇	胡蝶花	
四四六	蔞尾	コヤスクサ	烏園	蔞頭	蔞根	
四四七	蒲	ガマ	蒲黃	稻羽白兔	蒲槌	蒲鉾
四四八	菖蒲	アヤメクサ	臭蒲	香蒲	白菖	溪蓀
四四九	菰	コモ	蔞	蔞蔞		
四五〇	莎草	クサ	蔞	蔞		
四五二	莞	オホキ	龍鬚草	懸莞	龍鬚草	鼠莞
四五三	蘭	イハキ	虎鬚草	龍鬚草	燈心草	

四四八	芎	イラ	魚脰	芒刺	イラメク
四四九	菴	コケ	水衣	羅	蛇鱗
四五〇	卷柏	イハグミ	石章		
四五二	松	マツ	五粒松	五鬘松	五葉松子
四五三	栢	カヘ	海松子	新羅松	羅木
四五四	杉	スギ	榲	倭木	沙木
四五五	檜	ヒノキ	瑞宮材	サキクサ	楮
四五六	椴	クハ	榲	榲	榲
四五七	桑	クハ	榲	榲	榲
四五八	柘	ツミ	榲	榲	榲
四五九	栢	ツミ	榲	榲	榲
四六〇	栢	ツミ	榲	榲	榲
四六一	栢	ツミ	榲	榲	榲
四六二	栢	ツミ	榲	榲	榲
四六三	栢	ツミ	榲	榲	榲
四六四	栢	ツミ	榲	榲	榲
四六五	栢	ツミ	榲	榲	榲
四六六	栢	ツミ	榲	榲	榲
四六七	栢	ツミ	榲	榲	榲
四六八	栢	ツミ	榲	榲	榲
四六九	栢	ツミ	榲	榲	榲
四七〇	栢	ツミ	榲	榲	榲
四七一	栢	ツミ	榲	榲	榲
四七二	栢	ツミ	榲	榲	榲
四七三	栢	ツミ	榲	榲	榲
四七四	栢	ツミ	榲	榲	榲
四七五	栢	ツミ	榲	榲	榲
四七六	栢	ツミ	榲	榲	榲
四七七	栢	ツミ	榲	榲	榲
四七八	栢	ツミ	榲	榲	榲
四七九	栢	ツミ	榲	榲	榲
四八〇	栢	ツミ	榲	榲	榲
四八一	栢	ツミ	榲	榲	榲
四八二	栢	ツミ	榲	榲	榲
四八三	栢	ツミ	榲	榲	榲
四八四	栢	ツミ	榲	榲	榲
四八五	栢	ツミ	榲	榲	榲
四八六	栢	ツミ	榲	榲	榲
四八七	栢	ツミ	榲	榲	榲
四八八	栢	ツミ	榲	榲	榲
四八九	栢	ツミ	榲	榲	榲
四九〇	栢	ツミ	榲	榲	榲

四七一	梓	アツサ	梓弓	楸 <small>ヒナキ</small>	最木	久木
四七一	漆	ウルシ	金漆樹	コシアラノ木		
四七二	穀	カヂ	楮			
四七二	柞	ユシ	クシノ木	梳	コナラカシハ	
四七二	柎	カシハ	青柎	平柎	御綱柎	柎濟
四七二	柎	ナカカシハ	ナラノヒロハ	青柎	干柎	
四七二	柎	イハトカシハ	藉以柎葉			
四七三	檜	ナラ	檜	檜	柔木	
四七三	檜	ヤニレ	粉			
四七五	白樺木	ヌテ	樺	アフチ	楠木	五倍子
四七五	棟	アフチ	相市	苦棟	金鈴子	センダン
四七六	歴木	クヌキ	御木園	舉樹	釣樟	鳥樟
四七七	檉	アハキ	阿波檉	檉 <small>カシ</small>	萬年木	扭檉
四七七	檉	カシ	白檉	楸	手楸	足楸
四七九	槻	ツノキ	槻弓			
四七九	檀	マユミ	杜仲	衛矛	錦木	
四七九	檀	エ	榎	榎	檜	檜
四七九	檀	駿馬	六駁	繫迷	檜	梓楡 <small>ヒナキ</small>
四八一	辛夷	コブシ	ヤマアラ	ハキ	コフジ	ハシカミ
四八一	檜	シキミ	莽草	蘭草	鼠莽	木密
四八二	石楠草	トヒラノキ	シヤクナギ			
四八三	杠谷樹	ヒララギ	比々良木	巴戟天	黃岑	
四八三	杠谷樹	ヒイラギ	狗骨樹	剛穀樹	貓兒刺	
四八四	欒	ムクレンシノキ	數珠	無患子	木欒子	
四八五	檳榔	ヒンロウ	アヂマサ	檳榔	毛車	
四八五	羊躑躅	イハツハジ	茵芋	山檜	アイツ	
四八六	蜀漆	クサキ	恒山苗	ヤマウツキ		
四八六	竹	タケ	吳竹	管竹	雪竹	寒竹
四八六	竹	タケ	小竹	苦竹	河竹	箭竹
四八六	竹	タケ	厚朴	木蘭	合歡木	

卷十七

○禽鳥第十七

四九一	雞	ニハトリ	長鳴鳥	木綿付鳥		
四九二	雉	カケ	ニハトリ	カケロ		
四九二	雉	キジ	無名雉	名鳴女	山雞	鸚雞
四九二	鳩	ハト	雛鳩	豆見	鴿 <small>ハト</small>	斑鳩
四九二	鳩	ハト	豆甘鳥	臘背鳥	軟鳩	青鳩
四九三	雁	カリ	河雁	鴻	菱喰	朱雁
四九五	鶯	サキ	鶯	鶯	五位鶯	
四九七	鳩	ソヒ	翠鳥	魚虎	シヨウビ	カハセミ
四九七	雀	ス、メ	確女	春女		
四九八	鷓鴣	サ、ギ	鷓鴣	桃蟲	巧婦	鷹虎
四九九	鷓鴣	トビ	鷓鴣	桃蟲	割草 <small>コシ</small>	
四九九	鳥	カラス	鴉	ホソカラス		
四九九	木兔	ツク	都久	ミ、ツク	梟	フクロウ
四九九	木兔	ツク	鴉	ホソカラス		
四九九	木兔	ツク	鴉	ホソカラス		
四九九	木兔	ツク	鴉	ホソカラス		
五〇一	桃花鳥	ツキ	角鴉	鴉	幸胡	
五〇一	鴉	モズ	鴉	伯勞	百舌鳥	伯趙氏
五〇二	鶻	シギ	志藝	鶻	田鳥	鴉
五〇三	護田鳥	オスメドリ	鳩	澤虞	ウスベフ	
五〇四	水雞	クヒナ	雁	秧雞		
五〇四	鷓鴣	ミサゴ	覺賀鳥	水沙鳥		
五〇五	鷓鴣	ニハクナプリ	鷓鴣	稻負鳥		
五〇六	鴨	カモ	鴨	鴨	鴨	
五〇七	鷓鴣	カモメ	鴨	鴨	鴨	
五〇八	鷓鴣	カマメ	鴨	鴨	鴨	
五〇八	鷓鴣	カマメ	鴨	鴨	鴨	
五〇八	鷓鴣	カマメ	鴨	鴨	鴨	
五〇八	鷓鴣	カマメ	鴨	鴨	鴨	

六〇蝶 テフ 蛺蝶 野蛾 綠蝶 紺蝶 鳳蝶
 蛾ヒル 燭蛾ヒトリムシ
 六〇蟬 セミ ナハセミ ムマセミ カムセミ
 クツクツボウシ ヒクラシ

東雅目錄終

戊辰の戦後、おのれ東奥より脱して上國に走れり。京に在りては竹苞樓を主とし、坂に在りて玉淵堂を主とす。共にこれ書肆なり。此時江戸の書估に近半といへるが、東西に來往して其業を營めり。面しばく接するより、はては言葉かはす中とはなりたり。余は萍跡三年にして東に還り、居を東京に占めし。後京橋に吉川といふ書舗あり。其階上に書籍閱覽所を設くと聞き、直に赴きて其主人に接すれば、何ぞ計らん。幾年浪游の日、相識れる。近半その人ならんとは、互に無事健全を賀し。余は痛く其舉を賛したり。主人は半七と稱し。本姓は鈴木氏。其父は木板割鬮師なりといふ。家まづしければ十歳前後の頃より、はやくも商家の丁稚に遣らる。最初米屋に往きしが、時價の昂低を利するは、正路にあらずと家に歸る。再び菓子屋にやらる。是又甘き物は腹の毒なりとて、古道具屋に入る。其商ふ所を見るに、贗物を真物なりと人を欺くこと往々あれば、人たる者の爲すべき業にあらずと。是に於て自選ひて、本屋は世に利益する商賣なりと、書肆若林清兵衛の店に住込む。是ぞ主人が身を立てて今日ある起因なりける。いとまめやかに勤めたれば、十九歳の時、安政自營者となる事を許さる。名は獨立なれど、資本としては生家の姉が衣笄を典賣して、恵み與へられたる若干の金あるのみ。されど同業の大家なる山佐山藤玉久などに愛眷せられ、彼此の注文を受け、有無を運する仲買となり。着實と勉強とをもて事に従ふ。六七年。

諺に云ふ、稼くに追付く貧乏なし。長姉の四谷にて近江屋と云ふ貸本屋に嫁げるがあり。子なければとて主人は、其家つぐ事となる。是ぞ吉川氏にして、近江屋半七と稱するより。近半をもて其呼名とはしたるなり。

當時かの尊攘の論盛り起り、諸藩の人々京都に入り集ひ、上方の繁昌いふばかりなし。されど京坂の江戸を見る。江戸の上國を見る。互に危機の其中に伏するあるを懼れ、商人の取引は皆手控となり、何品とても謂ゆる品拂底の状況とはなれり。主人おもへらく、上方に赴き、直取引したらんには、雙方の便利を與ふるは固より、意外の贏利を得ることあらんと心に決め、此時代は現今流車一日程にて奔る道も十餘日を費し、箱根大井の山越し河越し、旅路の艱苦は今日海外旅行にも遙に超えしなり。かくて主人は數箇の荷物を飛脚屋に託し、自身は草鞋百里にして大坂に至る。これ元治元年の秋にて二十六歳の時なり。其携へ行きし江戸出版の書物は、餓虎に逢へる食物の如く、一朝に賣り盡し、其持ち還りし京坂の典籍は、大旱の雲霓に均しく、亦日を終へずして一冊だも剩さざりき。我が策は當れり、我が業は成れりと、勇み立ちて江戸大坂の間ゆきかふこと、年に幾度となく、其度ごとに實往實歸にてありしなり。維新の後も引繼きて往來せしが、時勢の一變に東西の雲霧も晴れ、加之海運の便も起りしかば、我も我もと西より東へ、東より西へ、入込み入

替り、競て商業を營む事となりしより、主人は又夙く此業の獨擅す可らざるを知り、頓て上方行は止めてけり、其見と云ひ其斷と云ひ、商理の奧秘は此處に在るを知るべし。

明治三年十一月、吉川書房を南傳馬の第一街に開き、五年に書籍展覽場を設けしなり。この展覽は近江屋の舊業なる貸本を繼續したる者なれど、其書物は舊新全く懸隔す。此時上下争て西洋の學風に歸向し、福澤中村諸氏の手に出づる翻譯書は、世人の渴望する所なれば、多く夫等の書を備へて誦覽に供し、其場を代觀所と稱す。一時一錢の見料を納め、隨意に繙閱せしむ。これぞ我國に於ける圖書館の濫觴といふべき。而して又古書舊典の放棄すべからざるを慮り、同業數人と甲乙社を結び、毎月二回の古本市をまた此階上に開きたり、新學を導き、舊學を保つ。主人の斯道に忠なる、余は目前これを見て、毎事其感に堪へざるなり。

同しく九年十一月、火災に逢ひ、家宅も灰燼となりしかば、代觀所も甲乙社もこゝに止め、本舖再造の後、岡三橋の推舉もて、宮内省御用の命を蒙り、翌十三年より、忝くも兩陛下の思召より成立ちたる幼學綱要、婦女鑑の刻本製造つかうまつる。續きて萬葉集古義の版行となる。一百五十卷の大部書にて、十年に亙りたる大事業も、首尾よく其功を畢へぬ。此他大政紀要、孝節錄、殉難錄、報德記など、宮内の出版は一切いそしみたり。かゝりければ、

華族諸家も刻本の事としあれば、必吉川書房に命せらる、例となり、三條岩倉毛利三公の歌集を始め、加賀の前田家、水戸の徳川家、其出版書籍みな此書房にて調製し、勝伯爵の開國起原、重野博士の伏敵編など、皆發兌してけり。又専ら中等教科の諸書を作り、府縣の中學校、師範學校、女學校等に採用されたる者、その幾十百種なるを知らず。三年前弘文館の號を建て、豫約出版の舉あり、古實叢書の如き、實に四千餘名の約者を得てけり。其世人に信用されしをトすべし。一回二回既に其功を完うし、今第三回に及へり。其中に大内裏圖考證武家名目抄の如き、希有の書と云つべし。又本居全書を完結し、現に印刷局編纂なる朝陽閣字鑑も、其半に及はんとす。

主人は質實寡言たえて、浮華の事なし。今日東京書肆を數へ來れば、必五指の中に擧らるべし。其かく如きに至りたるは、決して一朝一夕の僥倖に出でたるにあらず。其多年の辛苦經營と、身を守るの堅固にして、事を視るの敏慧なるとあるなり。松山氏を娶りて、一男三女あり。男直七は中學を卒へ、志願兵より陸軍歩兵少尉に任し、二十七八年の役に中尉に陞り、臺灣に入り、澎湖島の先鋒として銃創を負ひ、勳等賞賜等あり。則二代目半七なり。女婿二人、林縫之助、櫻井庄吉、共同して事を執り、一家温然その業益盛なり。主人の如きは、其齡の耄耋を越ゆと雖とも、多懼多辱の憂なかるべし。然るに六十四歳を一期として、此

世を去りしは、惜みても尙餘りあるなり。

主人は天保十年己亥元旦、本所徳右衛門町に生れ、明治三十五年十二月四日歿す。越三日、菩提所なる牛込原町願正寺に葬む。其月九日は初七日の逮夜とて、親族知人を請じて齋食の薦ありたり。余も其席に列り、人々と昔をしのび、今をかたる。其中に舊主人は身を書商に委ぬる五十年、この人の追善供養には、世に有益なる書物を出版して、紀念となさば、千部萬部の誦經にもまさるらんと云ひ出し、人あり、滿座異議なかりしが、何書よけん、と云ふに至りては、滿座また其書名を呼ぶ者なし。林曰く、此事は大槻先生に一任するに若かず。滿座また其聲に和同して、余が其任に當る事となしたり。爾時我言ふ、三十年の交誼も、宿因縁にこそ、敢て否むべきあらじ。只一言あり、一任すとあらば、他の喙を容れざるを誓へ。衆曰く諾こ、に於て其書は積年の希望なる伊呂波字類抄を定め、百箇日を期として引受けたり。因て次日より校正に着手し、黒川博士の藏に古寫真本あれば、參互審訂し、十日にして第一卷を了し、これを活字に付せしに、一葉を組み立て來りて曰く、異體の文字極て夥し、一々木字に刻せざるを得ず。此事たる決して短日月の成し能ふ所にあらずと、余その紙を熟視して、普通の工事にあらざるを悟りしかば、其書に代ふるに白石先生の東雅を以てし、字類抄は第二回の出版とせんと約したり。歲茲に暮れんとす。多少

の文債酒債もあるなれば、數日に處理し、新年は俗を免れざる時誼もあらんと臘尾に逼り、其煩を豆州修善寺の温泉に避け、香雲深處の一室に籠居して、東雅を訂正す。例言なる青黄の二本を以て、三分の二を校了したれども、不審の字句甚多ければ、旬有五日にして歸京し、是より家に在りて朝は天明を待ちて机に向ひ、夜は燈下に筆を勞し、更に十日夜を費して全部を畢へぬ。而して、活字の方も、一月十五日より校正を送り來り、一時は原本の訂正と、活版の初校再校と、同時に輻湊し、目も眩くばかりなりき。遂に佛涅槃の日を以て其業を完うし、尋て目錄を製り、解題例言と、尙幾日かを歴て、けふの此日に筆を擱く事となる。此訂正五十餘日の間に、自慢と愚癡との二事あり、後の話柄に之を記しおかんも亦、臧悔の一端ならん。

自慢とは白石先生の博學なる其筆になりたる此東雅、和名鈔をはじめ其引證は内外の群籍に涉れり。此書の訂正は最初類本を以て参考せば、事足りなんと定めしに、字句の上いぶかしき事共殊に多く、折角出版するも、誤謬を訂さず、遺漏を補はずば、何の詮もなし。いで、原書に當らんと、藏書ある限りを座傍に取出せり。倭名鈔は前にも云ひし如く、箋註本を用ひ、一々引合せて校したり。其他は右に日本紀舊事紀古事記萬葉集抄古語拾遺、令義解姓氏錄など積み、右には爾雅說文、文選正字通等を重ね、背後の一堆は、本草綱目

古名錄物品識名異名類編より、翻譯名義抄佛語字典等なり。本書讀過の際、苟も心に不審を感じ、意味の通じかぬると見る所に逢へば、直に左右の書を取り、其原文に照して加朱したり、されど時日の期あるを以て、悉く檢せしにもあらねば、訂正の遺漏も無して云ふ可らず。とは云へ普通傳寫本に超え、世人が引證に供せらるゝに、甚しき過誤はあらじと自ら信するなり。

神代の事實を容易に檢せし事に就て、回顧すれば、明治三年の事なり、春より秋に互り伊勢の津に寄寓し、何事もなすことなく、空しく時日を費すなれば、國典を研究せんは此時と思ひ、古事記傳を初より終まで、細密に讀みたり。神代の事に新説を吐きて見んなど思ひたれば、上卷には一入力を注ぎ、參見として、日本紀舊事紀にも及ひぬ。かくて六國史より令式等の書も一わたり涉りたり。三十四年前に學ひし事の、今日其餘蔭に依りたるは、我ながら不可思議を感ずるなり。又支那訓詁の學は、從前の漢學者多く之を専門の業とし、甚しきは局外視せし者もあり、我が父にておはせし人は、經學文章をもて世に立ち給ひしかど、爾雅說文には及ひ給はず。余は壯より學者必修の學と思ひ、專究とまでには至らざるも、兩書とも限なく目を通し置きたり。今日說文博士と自稱する高田竹山と、時々相會して、談この說文に及ひ、其問答論難さのみ譲らざるは、是又不可思議の一なり。又支那

本艸の事は姻戚なる森枳園に教を受けし事もありて一通りの學は修めたり。今日博士あり學士あり澤の如く山の如しされど神代卷と爾雅説文とを左右に置き剩さへ佛書に及び譬へば囊中の物を搜くるが如く手に從て同一に其出典を證し得る者は幾許ありや。是れ余が自慢とする所なり。とはいへ蟲豸門蟋蟀の釋文に毛詩に見えし莎雞羅願等爾雅翼有青褐兩種の語あり。莎雞は斷風七月の篇にあるなれど羅願といふ蟲名は聞きも及はずされど三百篇の中には種々の事物もあればと詩經二冊かいくり見たれど見あたらず。夫より詩經名物圖說同じく辯解など云へるをも檢したれど見出す能はず。困じはてたる曉ふと考へ付きたる事あれば四書全書總目を檢せしに經部小學に爾雅翼は宋の羅願の撰とありき等の字に誤られ人名を蟲名と思ひ徒らに勞したるなどは餘り自慢にもあるまじ。

愚癡とは去年の暮より五十日ばかり然も嚴寒の候に夙に起き夜に寐ねこの校訂に齷齪せしは何の故ぞ。若も白石先生の自筆本を見しならばかゝる苦辛にも及ふまじ。此東雅の書ありてより以來凡そ百五十年明治以降其手寫せし人は幾十百人ぞ。世に完本なきを見れば多くはこれ無學文盲の手に成りし者と見てよけん。この無學文盲者のためにかく苦勞し其校訂して完本となりしと雖とも別に異彩を放つにもあらずつまる所

尋常の本なるのみしか思へば腹の立つやらなさけないやら考へ來る時は其馬鹿馬鹿しさ實に沙汰の限りと云ふべし。是即愚癡なりけり。されど最初よりかゝる惡本のみと悟らずして安請合せしは我が身を責むるより外ぞなき。我に一任せよ。容喙すなど大言せし手前今ぞかく慙むにあんなる。

白石先生が十世の孫なる新井太吉子は名古屋市に住して辯護士たり。其承諾を得ねば固より印行する事あたはず。文通にて允許を求めしが既に先約ありとか返事も埒あかず。是に於て二月八日の夜十時の汽車にて走り翌朝名古屋に着き許諾の事を了し。即夜十二時の最急行にて次日の九時に新橋に着車す。一日あけしかば活版の校正も待ちぬらんと思ひ二夜ろくく安眠もせぬ體にて停車場より直に築地活版所に往き三十二頁を訂正したり。其他一日に八十頁を校合したる事も一再ならず。六旬になんくたる男のかく自ら勞せねばならぬとは畢竟傳寫本に完本なき故ぞかし。是又愚癡をいふの一なり。

さはさりながら其愚もおろかにはせず。まめやかに事とりしは外には此書を見ん人々に一字一句も誤謬を傳へざらしめんと。老婆心アハレ讀者よ傳寫本と引内には三十餘年の交誼ある近半主人の冥福を祈る。この二事に外ならず。南無阿彌だんぶやもあみ

だんぶやまうだなまうだ。

東にはふ言葉を手向艸西の臺の花とこそさけ

明治癸卯二月念八日

空也悲自利無無明院正阿彌陀佛如電合十

謹啓先代吉川半七儀書籍業に従事仕候は五十年に候其追薦供養には世に有益なる書物を出版して紀念と致さんは此上も無き修福と存候因て第一回は百箇日を期し東雅を出版し次て小祥忌には伊呂波字類抄を印行し大祥忌には更に珍貴の書を上梓せんと親族共と協議仕候本月十三日百箇日相當に付東雅を調製仕候年來御眷顧を賜り申候間一部拜呈仕候御座右の御用にも被成下候は、地下の靈さこそ満足仕らめと存候乍喪中不憚失敬如此申上候以上

明治三十六年三月

二代目吉川半七再拜

明治三十六年三月一日印刷
明治三十六年三月十三日發行

非賣品

著者 故新井君美

發行者 吉川半七

東京市京橋區南傳馬
町一丁目十二番地

印刷者 野村宗十郎

東京市京橋區築地
三丁目十五番地



